

Lynda S. Bell,

*One Industry, Two Chinas:
Silk Filatures and Peasant-
Family Production in Wuxi
County, 1865-1937.*

Stanford : Stanford University Press, 1999,
xvii + 290pp.

べん のう さい いち
弁 納 才 一

I

本書は、1865～1937年の無錫における製糸業の発展について、農民、地方エリート、国家の各々の対立と協力の関係を通して論じたものであり、アメリカにおける近代中国研究のひとつの到達点を示している。なお、本書のはしがきによれば、著者のリンダ・ベルは、1979～81年に南京大学で交換留学生（UCLAの博士課程）として無錫県蚕糸業に関する調査を行い、また、86年と87年に北京の中国社会科学院経済研究所を訪れ、社会科学研究所（所長は陳翰笙）や南満州鉄道株式会社（満鉄）による調査資料を収集・検討したのをはじめ、他にも中国各地の図書館や档案馆などを訪れて多くの資料を収集するとともに、聞き取り調査も行っている。本書は、以上のようにほぼ20年間にわたる著者の研究の集大成である^(注1)。

II

まず、本書の構成を以下に記しておこう。

- 第1章 序——2つの中国の話
- 第2章 清末における市場と権力
- 第3章 なぜ無錫なのか？——商人の競争と長江デルタにおける生糸生産の変化の概略

- 第4章 公的活動範囲か個人的利益か？——無錫における繭取引の擁護
- 第5章 危険にさらされている無錫製糸業投資家
- 第6章 蚕糸業における女性。いかにして性別分業が小農家族生産を再形成したか
- 第7章 近代の伝播——女性と蚕糸業改良政策
- 第8章 結局は成功だったのか？——ブルジョワジーの営為と国民政府の介入
- 第9章 結論——農民、工業、そして国家

また、各章の概要は、以下のとおりである。

第1章では、無錫における近代製糸業（「1つの工業」）は中国で最も早く、かつ最も成功した新しい工業であり、製糸工場と小農家族生産が相互依存関係にあった（「2つの中国」）と述べている。また、中国の発展に関する論争は、まず1920年代に現れ、中国の知識人の多くは農民の貧困が帝国主義の圧制的本質と地主・小作の階級関係に根ざしているとし、一方にJ・L・バック（J. L. Buck）による調査に基づき、農民の貧困を解決するには革命よりも改良が必要だと考えた者もいたが、1949年の共産党勝利で革命的選択肢が採用された。やがて、アメリカで新しい研究が登場したとし、西欧の圧力がなくとも腐敗した階級制度によって農民は蓄積の可能性を奪われていたとするV・リップト（V. Lippit）、家族労働の集約的使用に基づく小農家族経営は発展なき成長だったとするP・ホワン（P. Huang）、20世紀初頭に商業化の加速した地域で農民の収入が増加したとするL・ブランド（L. Brandt）やD・ファウアー（D. Faure）、中国が20世紀初頭に経済成長の離陸段階に達したとするT・ラウスキー（T. G. Rawski）を挙げ、著者自身は、定量化の作業に加えてエリート、農民、国家の間の複雑な政治的闘争を考慮する必要があるとしている。

第2章では、エリート、農民、国家の各々が長期安定的な商業的農業の秩序を生み出したことを論じている。長江デルタの人口密集が穀物不足を導き、清代に無錫の農民は外地から米の供給を受けるために綿業を発展させ、また、地方エリートは商業化の促進と市場の発展を正当化するために公共の福利と

いうイデオロギーに基づいて善堂（饑民に粥を施すなどの慈善を行う組織）や義倉（凶作に備えて設けられた共同の米穀儲蔵倉庫）を設けたが、小農家族経営が発展するにつれて地主制への闘争が起こった。一田両主制、抗租抗糧闘争、分割相続、人口増加などが農地の細分化を助長し、農民による富の蓄積や投資を非常に困難にし、地主は保有地からの安定収入の保証がなくなって土地改良や農業技術革新に専念しなくなり、儒教秩序下で社会的地位が最も低かった商人は官職の取得や土地購入に奔走して資金を蓄積できなかった。小農の商品作物栽培や手工業生産の発展によって、エリートは土地所有からの収入を増大させ、国家は税収源を安定させることができたが、清末には土地税を適切に徴収できなくなり、しかも太平天国の乱の鎮圧や列強への賠償金のための財源が必要となると、厘金などの商業税を増徴するようになった。

第3章では、1860年代に無錫が新しい繭の生産・流通の中心地として発展したのは、太平天国の乱による荒廃からの復旧を目指す農民と地方エリートの両方にとって養蚕が従来の農村副業の織布よりも利益があり、また、世界市場と上海の製糸工場の繭への需要が高まり、さらに、新しい養蚕技術が導入されたからだと述べている。無錫では、上海の製糸工場が繭行（養蚕農民から繭を買い集めるための組織ないし商人）を通じて繭を買付けると、20世紀初頭までにほとんどの小農が副業を桑栽培や養蚕に切り替えた。繭取引にかかわる責任とコストは無錫のエリートの繭行所有者と厘金を免除されていた外国企業に雇われた買弁との間で分担された。やがて無錫にも製糸工場が設立されると、買弁は重要性を失ったが、繭行所有者は顕著な役割を演じるようになった。ただし、旧来の商人が省政府に圧力をかけて繭行を制限したり、繭買い叩きに養蚕農家が反発して暴動を起こしたりすると、繭商人は省政府に援助を求めた。

第4章では、外部の商人との競争や1910年代に無錫で強くなった繭商人の地方における商業的利益の保護・発展のために、無錫のエリート（繭商人）が無錫繭行業公所を組織し、市場を統制・支配する権

利を守り、商業税率に影響を及ぼそうとし、さらに繭取引が発展するにつれて世界市場向け貿易の促進に努めたことが述べられる。商業上の利益を守ろうとする無錫のエリートとより多くの繭取引に関する商業税を徴収しようとする省政府の官僚との間には争いがあったが、両者は太平天国の乱からの復旧と各々の利益に繋がる養蚕および繭取引の発展のために協力して養蚕業の発展を奨励した。

第5章では、無錫の初期の製糸工場の経営には、原料繭の調達難、労賃の上昇、重税という3つの危険性があり、これらの危険性を回避するために、「所有権と経営の分離」の制度（租廠制）が現れ、エリート上層の製糸工場設立者・所有者は、経営にかかわる危険性をエリート下層の製糸工場経営者につけ回したことが述べられている。

第6章では、調査資料を利用して無錫の小農家族生産について分析している。無錫の農民は、自給が不可能なほど零細で、しかも多額の債務を抱えていたために現金を得るための副業に従事せざるを得なかった。労働代価の非常に少ない女子労働力を用いる養蚕の労働生産性は、主に男子労働力を用いる米麦作より低いが、綿紡織よりは高かった。製糸工場の繭に対する需要は女性の養蚕への転換を刺激し、耕地の一部が桑栽培に転換され、あるいは男子の中には農耕から相対的に給料のよい農業外の仕事に従事する者も現われたが、女性は主に養蚕や家事労働に従事し、都市部の製糸工場や紡績工場に働きに行くことは稀で、賃金労働の機会の範囲は限られていた。わずかな農地しか持たない農家の成年男子が出稼ぎに出ると、後に残された婦女子の1人当たりの収入は一層低くなった。

第7章では、無錫の繭の量と質を改善するために、地方エリートの若い世代が改良者として近代的な養蚕技術と改良蚕種を農民へ伝達しようと試みたことを述べている。近代的なものを伝達する側の養蚕改良者も伝達される側の農民もともに若い女性だったが、両者の間にはコミュニケーション・ギャップがあり、伝統・慣習に縛られた農民は近代的科学技術の伝達に反発した。また、養蚕改良（近代化）のために政府とりわけ国民党政府が強力な支援をし、科

学的養蚕技術の普及に努力したにもかかわらず、地方エリートが改良蚕種販売を悪用して不当利益をあさったりしたため、養蚕の近代化は農民の抵抗を受けた。

第8章では、1930年代初期までに世界大恐慌による圧迫も加わって土壇場にきていた中国製糸業を発展させるために、上海の銀行を後ろ盾とする国民党政府と有力な製糸工場所有者特に薛寿宣との間に新たな協力関係が生まれたことを述べている。製糸業の統制のための養蚕模範区政策の下で、無錫は養蚕模範区になり、官僚が繭の質から繭取引税に至るまで全てを監視した。養蚕模範区を通じて手を結んだ国民党政府と有力な製糸工場所有者は製糸業改良コストの負担をまず地方の繭商人に繭取引税の増加という形で押し付けたが、反発を買ったため、さらに養蚕農民に繭の低価買付という形でつけ回した。

第9章では、以上に述べてきたことを要約した後で、その後の中国の発展への連続性について言及している。すなわち、地方エリートの所有ないし経営する製糸工場と農村婦女子による養蚕は相互依存関係にあり、このことが無錫の製糸業を発展させ、また、政府も支援した。無錫において国家と地方エリートが協力して製糸業を発展させるという国民党政府の経済政策は、共産党政権初期の1950年代にまで引き継がれた。

以上のように、本書は、近代の無錫における製糸業の発展が、無錫の経済事情ばかりでなく、農民、地方エリート、政府の三者間の相互に対立面を内包しつつも協力し合うという複雑な関係によってもたらされたことを明らかにした。

III

さて、以上のような内容の本書にはいくつかの評価できる点がある。

第1は、その精力的な資料・文献収集である。著者は驚くほど多くの中国の図書館や档案館を訪問し、中国の研究者と交流し、無錫の製糸業関係者へのインタビューを行い、膨大な資料・文献を入手している。そのため、各部分の説明は、資料的根拠に基づ

き、具体的であり、かつ緻密であり、十分に説得力を持っている。

第2は、経済にとどまらず、政治、ジェンダー、社会あるいは文化などの多方面から分析を行っている点である。このような多面的な分析手法は、アメリカにおける研究にしばしば見られるが、日本における研究のそれとは際立った対照をなしている。しかし、無錫における製糸業の動向をその置かれた環境ないし事情から説明しようとしており、欧米の近代化モデルを基準にして中国の近代化の程度を測定するのではなく、中国自体に内在する論理を見出そうとする姿勢がうかがえ、共鳴できる。

第3は、中国農村女性労働の社会経済的な位置と意義を地域における製糸業の発展に関する分析に組み入れた点である。

しかし、疑問な点や不満な点もある。

第1は、資料批判を欠いている点である。第6章前半部において、特に自ら主要な資料と明示し、実際に多用している社会科学研究所（1929年）と満鉄（40年）の調査資料については、各々の調査機関の性格や調査時期の差異に配慮する必要があった。すなわち、満鉄の調査が日本の植民地経営のためのものであったのに対して、社会科学研究所の調査は中国共産党の理論的中枢をなす中国農村派の理論形成とつながりを持っていたし、また、1929年が世界大恐慌前であるのに対して40年は日中戦争中であり、2つの調査資料を単純に並列的に用いるのは問題が多い。なお、満鉄などの調査資料を用いた無錫の小農経営の分析に関しては、奥村（1993）の方が分析が緻密で優れていると思われる。

第2は、全体として1980年代までの議論ないし枠組みの上に立っており、90年代末に刊行されたものとしては斬新性や独創性にやや欠けている点である。これは、中国や日本における先行研究に対する把握の不十分さに原因があると思われる。著者は、中国における研究が概ねマルクス主義に基づく革命的視点を立つものとしているが、本書の序によれば、南京大学で嚴学熙教授との交流があったことが記されているにもかかわらず、無錫製糸業の研究で革命史観とは異なった見方を持っている嚴学熙の研究や

見解が参照されていない。また、日本における研究については、1978年の奥村哲の論文や81年の鈴木智夫の論文(注2)を参照しているが、少なくとも田尻(1979)や曾田(1994)の研究も参考にすべきだった。そして、第2章で詳しく述べられている一田両主制(田底権・田面権)についてもすでに多くの研究があることは周知のことであり、また、第5章において論じられている租廠制(工場経営者が工場所有者から工場を借りて経営するシステム)についても、曾田(1994)に記されているように、製糸工場の経営者が多額の固定資本の投資という危険を避け、所持する資本のほとんどを流動資本の面に用いることができたと評価されていることが知られている。このように、本書にはすでに明らかにされている点についての説明が多くあり、やや冗漫で退屈さを感じざるをえない箇所が散見された。さらに、経済的な面から見た中国農村女性労働の意義については、リング・グローブの研究を参照すべきではなかったか[グローブ 1993]。

第3は、著者の近代中国製糸業に関する捉え方に対する疑問点である。例えば、第3章において、著者は、在来手工製糸と器械製糸との競争が増大しているにも関わらず、商人が農民の家内生産と結合し、価格が器械糸よりも低く、低コストの家内労働力を利用することができたので、根強く存続したと見なし、在来手工製糸と器械製糸が競合関係にあったとしているが、両者はむしろ棲み分けの関係にあったのではないだろうか。

最後に、浅学者が敢えて高著の批評を試みたが、本書が一読すべき価値を有していることには何ら変わりないことを付言しておきたい。

(注1) 本書は、著者の博士論文を含む論文[Bell 1985a; 1985b; 1990; 1992; 1994]を基礎にして構成されている。

(注2) 奥村(1978)、鈴木(1981)。ただし、鈴木智夫をSuzuki Chifu、論文タイトル中の繭取引をsantorihikiと記しているのは、もちろんSuzuki Tomoo, mayutorihikiの誤りである。

文献リスト

<日本語文献>

- 奥村 哲 1978. 「恐慌下江浙蚕糸業の再編」『東洋史研究』37(2).
 ——— 1993. 「日中戦争前後の華中農村調査をめぐって——江蘇省無錫県の場合——」『人文学報・歴史学』(東京都立大学) (238).
 グローブ, L. 1993. “Mechanization and Women’s Work in Early Twentieth Century China”『柳田節子先生古稀記念——中国の伝統社会と家族——』汲古書院.
 鈴木智夫 1981. 「清末無錫における繭取引の発達と外国資本」『東洋学報』63 (1・2).
 曾田三郎 1994. 『中国近代製糸業史の研究』汲古書院.
 田尻 利 1979. 「19世紀後半期の江蘇における蚕桑奨励政策に関する一考察」『鹿兒島経済大学論集』19(4)・20(1).

<英語文献>

- Bell, Lynda S. 1985a. “Merchants, Peasants, and the State: The Organization and Politics of Chinese Silk Production, Wuxi County, 1870-1937.” ph. D diss. University of California. Los Angeles.
 ——— 1985b. “Explaining China’s Rural Crisis: Observations from Wuxi County in the Early Twentieth Century.” *Republican China* II (1) (November).
 ——— 1990. “From Comprador to County Magnate: Bourgeois Practice in the Wuxi County Silk Industry.” In *Chinese Local Elites and Patterns of Dominance*, eds. J. W. Esherick and M. B. Rankin. Berkeley: University of California Press.
 ——— 1992. “Farming, Sericulture, and Peasant Rationality in Wuxi County in the Early Twentieth Century.” In *Chinese History in Economic Perspective*, eds. T. G. Rawsky and L. M. L.. Berkeley: University of California Press.
 ——— 1994. “For Better For Worse: Women and the World Market in Rural China.” *Modern China* 20 (2) (April).

(金沢大学経済学部助教授)